

巻頭言——ひとを評価する教養と専門性

Preface : Culture and specialization to recognizing human beings

ひとの「評価」ということはとても嫌いである。受験教育による一面的評価が若者の人生を歪めてきたと考えているからである。受験教育批判は他日に譲るが、しかし、ひとの行動が複雑に絡み合っている現代の社会生活において、ひとを評価することなしに、私たちは日々を暮らすことができない。良い人ばかりではないこの世の中であれば、どのようにひとを評価するかということが重要になる。

教養の程度によって世間の評価が行われる。専門性の程度によって、専門家の評価が行われていると世間には信じられてきた。しかし、教養の狭い専門性は評価の一面性から適切な評価をしない。教養とは統合する知性であり、専門とは分析する知性である。大学のカリキュラムでいえば、教養科目と専門科目である。

しかし、今日、日本の大学では教養部を廃止して久しく、すぐに役立つとして専門を重視して、学生たちの教養を大事に育てようとしていない。すなわち、若者の半数が大学に通うようになって、学歴は上がったが、大学生（および大学教職員）の教養は必ずしも高くはならず、むしろ学歴と教養の相関係数は低くなったのではないか。昨今、このように考えられる大学をめぐる事象は枚挙にいとまがない。

ホットな話題でいえば、STAP細胞の論文は専門性が狭く、専門的には容易に評価できない。しかし、教養で理解しようとするれば、8名が合意して書いた共同研究論文であるので、論文内容については全員が理解し、責任を分かち合っているはずである。それなのに、なぜ一人が良し悪しの評価を一身に集めているのか。そもそも、科学の独創性は個人に属するはずだからである。しかし、今日の自然科学論文では当たり前前のことのようにだが、8名もの多くが論文に名

を連ねており、個人研究と共同研究の関わりあいに疑問がある。

ここに現代科学の手法と評価の問題がある。たとえば、大学教員は主に論文の数で評価されている。8名で書かれていれば、内容に関わらず、個人に配点すれば各1点、合計8点である。一人で書けば、配点は3点である。このような数値換算の評価には納得がいかない。

論文内容の専門性は狭く、一般的には専門家ですら容易に適切な評価はできない。たとえば、メンデルの遺伝の法則は当時評価されずに、30年間眠らされた。マクリントックの論文も評価されず、彼女は受理してくれない国際誌に投稿することを止めてしまったが、のちに高い評価を得た。ハーランも、専門誌でなかなか受理されなかったが、あきらめずに研究をつづけたという。

国際誌に投稿する努力は研究者としてすべきではある。しかし、その時に評価されない場合は、発表の場として本誌のような同人誌に意味が出てくる。本誌を始めたのは民族植物学の発表の場がないこと、他誌に海外から投稿された論文が課題内容ゆえに掲載を逃しそうになったこと、民族植物学に関する卒業・修士論文が公表されないまま眠ること、これらを見かねてささやかな冊子を始めたのである。

希望と欲望、実像と虚像、事実と幻想、現実と仮想、相対する概念の前者を、私たちは求めるべきであって、後者に誘惑されるのはほどほどにしたい。夢だけ追うのではなく、夢現に惑わされるのではなく、やはり夢を現にするには地道で限りない努力がいる。学問とか研究とかはそうした行為で、新発見は単に始まりにすぎず、これで終わるわけではない。

黍稷農季人 2014.4.23

